無意志自動詞の可能表現に関する研究

－中国人日本語学習者の使用状況を中心に－

梁 笑彤

【キーワード】
無意志自動詞、可能表現、中国人日本語学習者、使用状況

【要旨】
本稿では、アンケート調査とインタビュー調査を行うことにより、中国人日本語学習者（以下、ＣＬ）が可能の意味を表す無意志自動詞の基本形を使わない傾向がある、ということを明らかにした。そして、日本語教育現場においては、ＣＬが無意志自動詞の基本形を使わない理由を重視しておらず、これは、多くの教材において関連する説明が少ないことからも明らかである。

また、日本語と中国語の可能表現の違いについて、当該文で述べている出来事が実現するか否かが焦点化されている場合、ＣＬは可能の形態素を挿入する傾向があるのに対し、日本語母語話者（以下、ＪＮ）は動作主が想定されない限りは可能の形態素を挿入しないということを、当該の出来事が「習慣性であるか」あるいは「1 回性であるか」という条件から論じた。

最後に、ＣＬの無意志自動詞の不適切な使用を改善するための日本語の教え方を、日本語教師および教科書の 2 つの観点から提案した。

1. はじめに

日本語では、「荷物が届く」の「届く」などの無意志自動詞には、可能形がない。しかし、日本語教育においては、「無意志自動詞には可能形がない」ことに関しては、あまり重視されていないので、ＣＬは可能形があると考え、頻繁に以下の（1c）（1d）のような誤用を引き起こす。

（1）a.鍵がないので、ドアが開(あ)かない。

b.鍵がないので、ドアが開(あ)けられない。

c.鍵がないので、ドアが*開(あ)けない。

d.鍵がないので、ドアが*開(あ)くことができない。

（1）は、「ドア」が最後に、どのような状態になっているかを表現している。日本語では、自動詞の基本形で出来事の実現の可否を表すことができる。（1）では動作主が意志的に「開ける」という行為を試みるわけだが、しかし、「開く」という結果が実現しないと捉えている。一方、ＣＬは「開く」は無意志自動詞で、可能形がないということを意識しておらず、該当文では可能性を論じているのだと考え、（1c）（1d）のように、形式上は対応する「*開ける」、「*開くことができる」と可能形に変換してしまう。

そこで、本稿では、ＣＬを対象に、アンケート調査とインタビュー調査を行うことにより、無意志自動詞の可能表現の習得状況を明らかにした上で、ＣＬは無意志自動詞をどのように捉えているのかについて、考察する。

2. 無意志自動詞の可能表現についての先行研究

無意志自動詞の基本形で可能の事態を表す現象については、既に多くの先行研究がある（小林 1996、青木 1997、張 1998、張 2001、都築 2001、于 2006、呂 2007、楠本 2009 など）。

2-1　日中無意志自動詞の可能表現の異同に関する研究

まず、張（1998：88）は「中国語の場合は、可能補語の補語成分が動作によって引き起こされる状態変化を表すが、日本語の場合は、有対自動詞がそれを表すことが多い。言い換えれば、つまり有対自動詞は日本語の結果可能表現の主な表現形式であるということである。」と述べている。

次に、張（2001：104）によれば、中国語の自動詞には可能のニュアンスは含まれていない、という。そのために、自動詞の後にも可能の形態素を挿入して使うので、日本語との間にずれが生じてくるとしている。一方、日本語の場合は、可能の形態素の使用は意志性の有無に関係し、無意志自動詞や意志自動詞の非意志用法として用いられた場合は、可能の形態素を挿入する必要がないし、挿入すると非文法的になるとしている。

最後に、于（2006：146）は、「中国語は動作・行為重視で、その動作・行為の実現の可否に重点を置くものなので、意志性の有無や可能のカテゴリーを問わず、すべてマーカーで明示して表現する。一方、日本語は動作・行為と結果の両方に関わるので、意志性のある動作・行為についてはマーカーで明示して表現し、意志性のない動作・行為については自動詞でその結果を示すのである。」としている。

本研究では新たな視点として、無意志自動詞には可能の意味がないこと、単なる基本形で動作の実現の可否を表すことができることを検討する。

2-2　ＣＬの使用状況に関する研究

小林（1996：47-52）は、68 人の日本語学習者（そのうちＣＬは 25 人）を対象とし、「部屋に入りたいが、ドアが開かない」という場面を設定し、「開く」「開ける」「開けられる」のような動詞の使用状況について考察している。また、ＣＬと比較するため、ＪＮ（15 人）の傾向も調査した。

その結果、ＪＮは自動詞のアク系の使用が一番多かったのに対し、ＣＬはアケル系およびアケラレル系の選択が好まれる、ということが分かった（「あかない」「あいた」＝アク系、「あけられない」「あけられた」＝アケラレル系、「あけた」「あけない」＝アケル系とする）。

しかし本稿では、小林（1996）の分析には、以下のような問題点があると考える。

①設問として「開く」しか取り上げていないので、分析として十全とは言えない。

小林（1996：48）の調査で使用された設問では、

・「開くか開かないか」が焦点化されている
・動作主が想定される
・1 回性である

ということが前提となっており、そもそも可能の形態素が入りやすい要素がそろっている上での調査である。しかし、それでは十全な調査ができないと思われる。そこで本稿では、

・当該の出来事が実現するかしないかが焦点化されていない（予備調査問題 1～4）
・動作主が想定しにくい（アンケート調査問題 14）
・1 回性でない（予備調査問題 1～3）

といった状況を設定して、可能の形態素を挿入する要因が弱い条件における設問で、調査･分析を行う。そのことによって、ＣＬの無意志自動詞と可能の形態素の関係を十全に調査することができるだろう。この点に、本稿の独自性がある。

②アケルの場合、可能形と受身形が同じであることから、被験者がどちらのつもりで選択しているか分からない。

小林（1996：54）では、「『アケル』の場合、可能形と受身形が同じであることから、被験者がどちらのつもりで選択しているかわからない。」と述べられている。しかし、本稿の調査結果を見ると、ＣＬは母語干渉によって可能形として使っているのだと推測される。このことについては、さらに研究する必要があると考えられる。

③小林（1996）は相対自動詞による結果･状態の表現という視点から「自動詞の基本形」、「自動詞に対応する他動詞の基本形」、「対応する他動詞の可能形」という３つの選択肢を設定した。本稿では、無意志自動詞の可能表現という視点から、あらゆる可能形式を選択肢として設定し、ＣＬの使用状況を明らかにする。

3. 予備調査

本調査の前に、予備調査を行った。予備調査は、ＣＬが自然現象や習慣性の出来事を表現するのに、可能の形態素を挿入しない、という前提を検証することを目的とする。

予備調査は、日本国内において、日本語能力試験 N1 に合格しているＣＬに協力してもらった。全部で 5 人である。調査の結果、5 人の答えが一致した。予備調査の内容と回答は以下のようである。

1. 日：雪が消えた。
   中：雪化了。
2. 日：日が暮れた。
   中：天黑了。
3. 日：髪が伸びた。
   中：头发长了。
4. 日：歯がぽろっと抜けた。
   中：牙掉了。

1～4 のいずれの回答にも、可能の形態素が含まれていない。調査対象者 5 人全員の回答が一致したので、ＣＬはＪＮと同じく、自然現象や習慣性の出来事については可能の形態素を挿入しない、ということを以下の議論での前提とする。なお、予備調査の問題は本調査には含めなかった。

4. アンケート調査

4-1　アンケート調査の概要

4-1-1　調査対象者

本調査は日本国内において、日本語能力試験 N1 に合格しているＣＬに協力してもらった。全部で 86 人である。

また、ＣＬと比較するため、同時に 4 人のＪＮにもアンケートに回答してもらった。

4-1-2　調査内容

アンケートでは 20 問の設問を用意した。そのうちの 10 問（問題 1、3、5、7、9、11、13、15、17、19）はダミーで（無意志自動詞とは無関係の設問）、あとの 10 問が無意志自動詞に関するものである。

無意志自動詞に関する設問は以下のようである。

[Ｉ類無意志自動詞]

2、鍵がないので、ドアが＿＿＿＿　。

a.開(あ)かない　b.開(あ)けない　c.開(あ)けられない　d.開(あ)くことができない

4、この窓がどうしても_____ 。

a.閉まらない　b.閉まれない　c.閉められない　d.閉まることができない

6、（受け取る側）交通事故が発生したので、午前中に荷物が _____。

a.届かない　b.届けない　c.届けられない　d.届くことができない

10、あの車は何回も事故に遭ったので、もう _____。

a.直らない　b.直れない　c.直せない　d.直ることができない

14、水と油はあまりよく_____。

a.混ざらない　b.混ざれない　c.混ぜられない　d.混ざることができない

18、このカバンに全ての荷物が _____ 。

a.入(はい)らない　b.入(はい)れない　c.入(い)れられない　d.入(はい)ることができない

20、この薬で毎日目を洗えば、一週間で角膜炎が _____。

a.治る　b.治れる　c.治すことができる　d.治ることができる

[Ⅱ類無意志自動詞]

8、卵はナイフの背で_____ 。

a.割れる　b.割れられる　c.割ることができる　d.割れることができる

12、虫歯で歯が _____ 。

a.抜ける　b.抜けられる　c.抜くことができる　d.抜けることができる

16、この（汚れ）全然 _____ 。

a.落ちない　b.落ちられない　c.落とすことができない　d.落ちることができない

4-2　アンケート調査のデータ統計

（表 1）　設問 2

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	
a.開かない	9	10%	●
b.開けない	53	62%	
c.開けられない	23	27%	●
d.開くことができない	44	51%	

（内訳：「a」のみ：5 人、「b」のみ：30 人、「c」のみ：10 人、「d」のみ：16 人、
「a、c」：2 人、「a、d」：2 人、「b、c」：3 人、「b、d」：18 人、「c、d」：6 人、
「b、c、d」：2 人）

（表 2）　設問 4

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	
a.閉まらない	14	16%	●
b.閉まれない	30	35%	
c.閉められない	40	47%	●
d.閉まることができない	38	44%	

（内訳：「a」のみ：9 人、「b」のみ：12 人、「c」のみ：13 人、「d」のみ：4 人、
「a、c」：2 人、「a、d」：2 人、「b、c」：2 人、「b、d」：9 人、「c、d」：15 人、
「a、c、d」：1 人、「b、c、d」：7 人）

（表 3）　設問 6

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	
a.届かない	10	12%	●
b.届けない	63	73%	
c.届けられない	15	17%	
d.届くことができない	36	42%	

（内訳：「a」のみ：5 人、「b」のみ：33 人、「c」のみ：11 人、「d」のみ：6 人、
「a、b」：2 人、「a、c」：1 人、「a、d」：1 人、「b、c」：1 人、「b、d」：27 人、
「c、d」：2 人）

（表 4）　設問 10

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	
a.直らない	11	13%	●
b.直れない	52	60%	
c.直せない	26	30%	●
d.直ることができない	42	49%	

（内訳：「a」のみ：7 人、「b」のみ：30 人、「c」のみ：10 人、「d」のみ：8 人、
「a、b」：1 人、「a、c」：1 人、「a、d」：2 人、「b、c」：1 人、「b、d」：18 人、
「c、d」：12 人、「b、c、d」：2 人）

（表 5）　設問 14

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	
a.混ざらない	15	17%	●
b.混ざれない	44	51%	
c.混ぜられない	25	29%	
d.混ざることができない	36	42%	

（内訳：「a」のみ：10 人、「b」のみ：25 人、「c」のみ：9 人、「d」のみ：8 人、
「a、c」：1 人、「a、b」：1 人、「a、c」：1 人、「a、d」：2 人、「b、c」：1 人、
「b、d」：13 人、「c、d」：9 人、「b、c、d」：4 人）

（表 6）　設問 18

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	
a.入らない	16	19%	●
b.入れない	54	63%	
c.入れられない	35	41%	
d.入ることができない	51	59%	

（内訳：「a」のみ：11 人、「b」のみ：14 人、「c」のみ：19 人、「d」のみ：11 人、
「b、c」：1 人、「b、d」：30 人、「c、d」：6 人、
「a、b、c」：5 人、「b、c、d」：4 人）

（表 7）　設問 20

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	
a.治る	13	15%	●
b.治れる	52	60%	
c.治すことができる	43	50%	
d.治ることができる	37	43%	

（内訳：「a」のみ：3 人、「b」のみ：19 人、「c」のみ：18 人、「d」のみ：11 人、
「a、b」：2 人、「a、c」：3 人、「a、d」：2 人、「b、c」：11 人、「b、d」：12 人、
「c、d」：5 人、「a、b、c」：1 人、「a、b、d」：2 人、「b、c、d」：5 人）

（表 8）　設問 8

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	
a.割れる	25	29%	●
b.割れられる	45	52%	
c.割ることができる	35	41%	●
d.割れることができる	31	36%	

（内訳：「a」のみ：17 人、「b」のみ：19 人、「c」のみ：9 人、「d」のみ：9 人、
「a、c」：6 人、「a、d」：1 人、「b、c」：8 人、「b、d」：10 人、「c、d」：4 人、
「a、b、c」：1 人、「b、c、d」：7 人）

（表 9）　設問 12

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	
a.抜ける	18	21%	●
b.抜けられる	66	77%	
c.抜くことができる	10	12%	
d.抜けることができる	5	6%	

（内訳：「a」のみ：14 人、「b」のみ：56 人、「c」のみ：3 人、「d」のみ：1 人、
「a、b」：2 人、「a、c」：2 人、「b、c」：4 人、「b、d」：3 人、「b、c、d」：1 人）

（表 10）　設問 16

	ＣＬ		ＪＮの選択
選択肢	回答数	回答率	選択
a.落ちない	20	23%	●
b.落ちられない	53	62%	
c.落とすことができない	30	35%	●
d.落ちることができない	37	43%	

（内訳：「a」のみ：15 人、「b」のみ：23 人、「c」のみ：18 人、「d」のみ：15 人、
「a、b」：1 人、「a、d」：3 人、「b、c」：10 人、「b、d」：18 人、「c、d」：1 人、
「a、b、c」：1 人）

4-3　結果分析

まず、Ｉ類無意志自動詞に関する回答（問題 2、4、6、10、14、18、20）を見ると、無意志自動詞の基本形を使用することで出来事の実現の可否を表すことができることを理解していないＣＬが少なくなかった。また、ＣＬは無意志自動詞には可能形がないということを理解しておらず、無意志自動詞を使う場合は、その（形式上は対応する、誤用としての）可能形の使用率が高かった。

次に、Ⅱ類無意志自動詞に関する回答（問題 8、16）を見ると、ＣＬによる無意志自

動詞の基本形の使用率は、Ⅰ類無意志自動詞のそれよりも高く、全てのⅡ類無意志自動詞で 20%を超えたが、ＪＮの使用率と比べるとまだ低かった。

（問題 12 については、多くのＣＬが可能の意味を読み取れず、受身の意味と解釈したため、結果分析からは除外した。）

5. インタビュー調査

5-1　調査対象者と内容

アンケート調査の後、アンケートに回答したうちの 6 人にインタビューを行った。インタビューは、すべて 1 人ずつ対面で行い、使用言語は中国語であった。

インタビューの質問は以下の 3 つである。

①無意志自動詞があるということを知っていたか？

②各設問において、なぜ動詞の基本形を選んだ／選ばなかったのか？

③日本語を学習したとき、無意志自動詞には可能形がなく、基本形そのままで出来事の実現の可否を表すことができる、ということを教えられたことがあるか？

5-2　調査結果

①アンケート調査では、被調査者 6 人が無意志自動詞があるということを理解していなかった。

②ＣＬが無意志自動詞の基本形を選択した場合、特に選択理由があるわけではなく自身の語感で選択した場合と、周りのＪＮが話したことを聞き覚えていた場合があった。基本形を選択しなかった場合、その理由は、出来事の実現の可否を表現する場合は、基本形ではなく可能形を使用すべきであると判断したためであった。

インタビューの結果から、基本形を選択したＣＬは、無意志自動詞には可能形がないということを一般論として理解しているわけではなく、そのため、ある設問で基本形を選択しても、別の設問では（誤用としての）可能形を頻繁に選択し得ることが分かった。

③インタビューを受けた 6 人全員が、無意志自動詞について教えられたことがないと答えた（日本語教師が教えたとしても、教師もＣＬもそれを重要ポイントとして捉えていなかったため、ＣＬには教えられた記憶がない、という可能性もある）。

第 4 章と第 5 章の調査結果から次のことが明らかになった。

a. ＣＬは無意志自動詞そのままの使用率が低い。
b. ＣＬは無意志自動詞には可能形がないということを理解しておらず、（形式上は対応する、誤用としての）可能形を頻繁に使用する。
c. 当該の無意志自動詞に対応する他動詞の可能形を使ってしまうＣＬもいる。

6. 無意志自動詞の基本形の非用の理由

第 5 章で見たとおり、ＣＬは無意志自動詞をそのまま使う割合が低い。このことを以

下では、無意志自動詞の「非用」と呼ぶ。

6-1　可能形を選択する理由

6-1-1　母語の負の転移

以下の例を見てみよう。

（2）日：田中さんは水泳ができる。　（3）日：この薬で角膜炎が治る。

中：田中(田中さん)　会(できる)　游泳(水泳)。　　中：用(使う)　这个(この)　药(薬)　能(できる)　治好(治れる)　角膜炎(角膜炎)。

ＪＮは、（2）と（3）の事態を分けて認識している。すなわち、（2）の「水泳」の例では「水泳ができる」と言えるが、（3）の「角膜炎」の例では「角膜炎が治れる」と言わない。一方、ＣＬは、（2）も（3）も同じように認識しているので、どちらの例にも中国語の「能(できる)」、「会(できる)」などの（可能を表す）形態素を挿入する。それが原因で、ＣＬは頻繁に（3）「角膜炎が治れる」のような誤用を引き起こすのだと考えられる。

6-1-2　日本語教育での教え方

日本語教師は可能表現と可能形を教えるとき、動詞をどのように変換するかということばかりに重点を置き、「無意志自動詞の基本形で出来事の実現の可否を表すことができる」ということには、ほとんど重点を置いていない。まったく言及しない日本語教師もいると考えられる。

さらに、多くの教材においては「無意志自動詞」に関する説明が不十分である。本稿では、日本語教育の現場で頻繁に使用されている 9 冊の日本語教科書[1]（教師用指導書と文法説明書）を対象として、無意志自動詞に関する記述があるかどうかを調べてみたが、どの教科書でも有意志自動詞は詳しく説明され、要点もよくまとめられているのに対し、（出来事の実現の可否を表現する）無意志自動詞に関する記述は少なく、教科書の最後に載っている文法を整理した一覧にも含まれていなかった。

このような状況が、ＣＬが無意志自動詞とその可能表現を認識しにくい要因になっていると考えられる。

[1]『新版中日交流標準日本語初級（下）』（2005）人民教育出版社、『できる日本語・初級』（2013）アルク、『できる日本語教え方ガイド＆イラストデータ CD-ROM 初級』（2011）アルク、『できる日本語・初中級』（2013）アルク、『できる日本語教え方ガイド＆イラストデータ CD-ROM 初中級』（2011）アルク、『できる日本語・中級』（2013）アルク、『みんなの日本語初級Ⅰ』（2016）スリーエーネットワーク、『みんなの日本語初級Ⅱ』（2016）スリーエーネットワーク、『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説中国語版』（2014）スリーエーネットワーク

6-2　他動詞を選択する理由

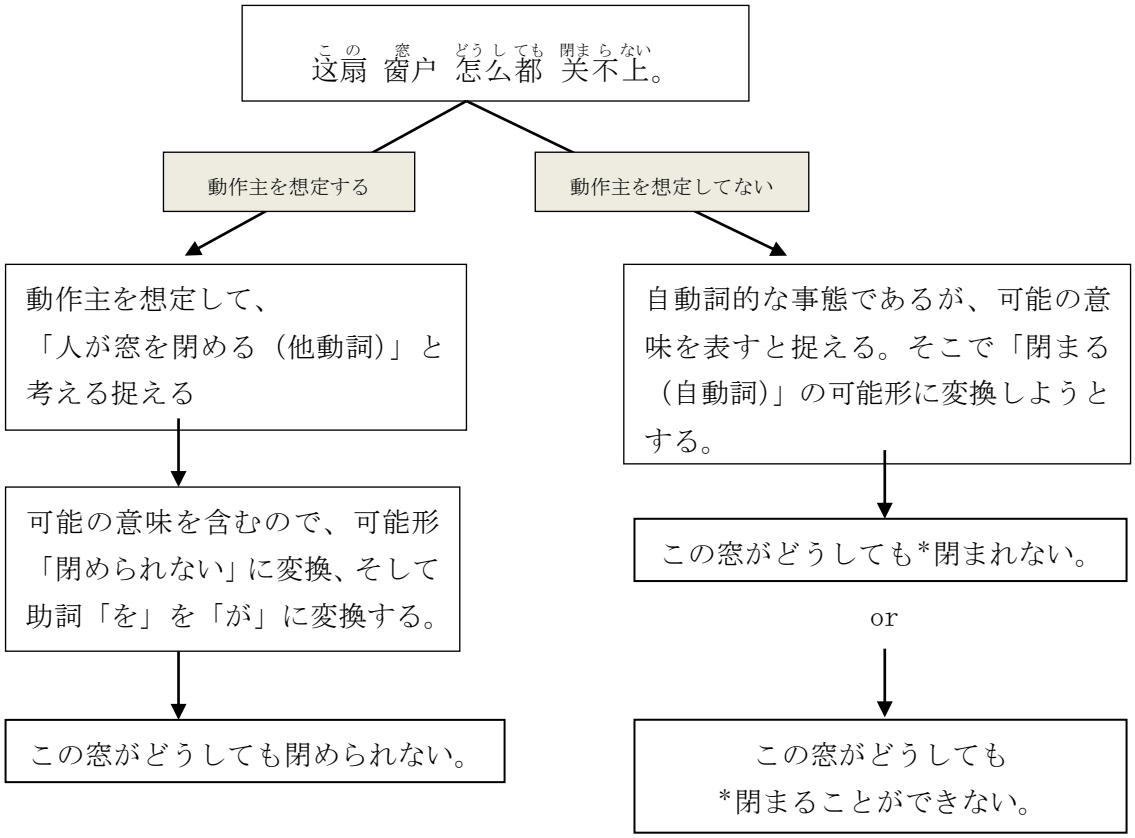
ここで、アンケート調査の問題 4 を例として分析したい。

この窓がどうしても閉まらない。

ＪＮは「この窓が閉まらない」を言うとき、動作主を想定していない。

一方、ＣＬは「この窓がどうしても閉まらない」という意味を表したいとき、動作主を想定してしまう。そして、動作主が存在するので、他動詞「閉める」を使うのが自然である、と考えてしまう。

上記のようなＣＬの思考過程を、図１のように分析した。



（図 1）　設問 4 におけるＣＬの思考過程

7. 日中可能表現の使う場面の違い

当該の出来事が実現するかしないかが焦点化されている場合、ＣＬは可能の形態素を挿入しやすいのに対して、ＪＮは動作主が想定されない限りは可能の形態素を挿入しない。ここに日中可能表現の大きな違いが存在する。

それを前提として、本章では、当該の出来事が「習慣性であるか」あるいは「1 回性

であるか」という条件から、この問題について考える。

まず、ＪＮもＣＬも習慣性の出来事、あるいは自然現象を表すとき、自動詞（中国語では動詞の基本形で、可能の形態素が入らない）で表現するのが一般的である。
以下の例を見てみよう。

（4）日：雪が消えた。
　　中：雪化了。

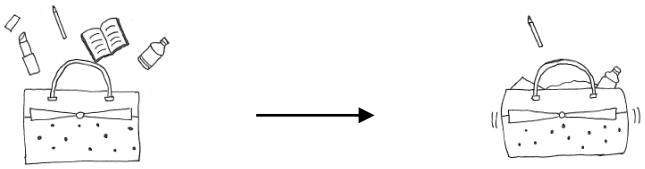
（5）日：日が暮れた。
　　中：天黑了。

次に、「1回性の出来事」である。ＣＬは「1回性で出来事」を表現するとき、頻繁に可能／不可能という捉え方をする。

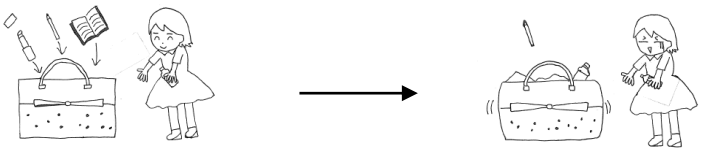
1回性の出来事には、動作主が想定される場合と、動作主が想定しにくい場合の 2 つがある。

まずは、動作主が想定される例を見てみよう。

（6）このカバンに荷物が入らない。



（図 2）　ＪＮの視点



（図 3）　ＣＬの視点

1回性の出来事を表現するとき、ＪＮは図 2 のように、動作主が対象（荷物）に力を加えて変化を生じさせ、「入らない」という結果になった場合でも、動作主を考慮せず、「荷物が入らない」という結果状態のみを強調し、自動詞で表す。

一方、ＣＬは必ず動作主を想定する。(6) の「荷物が入らない」場面では、動作主の動作に視点を置き、一生懸命荷物を入れようとしたが無理であったための結果と捉えて、可能形および否定形で表すのが一般的である（中国語は自他同形）。

しかし、すべての場合において動作主が想定できるわけではなく、想定しにくい（あるいは動作主が存在しない）場合もある。次に、動作主が想定しにくい、かつ 1 回性の出来事の例を見てみよう。

（7）これ以上、人口が<u>増えない</u>。

（7）では、動作主が誰であるかを明確にしにくいので、ＣＬは特に動作主を想定しない。しかし、「人口が増えない」は習慣的なことではなく、１回性の出来事であり、必ずある原因または条件（少子化、高齢化の進行など）によって「人口が増えない」という結果になるのである。このとき、ＣＬは「ある原因が増加を不可能とする」と捉え、可能の形態素を挿入しようとする。

注目すべき点は、肯定表現より否定表現の方が「可能形の形態素」を挿入しやすい、ということである。以下の例を見てみよう。

（8）隣の人が「鍵ならありますよ。ここに落ちていました。これですか」と鍵を見せました。
「ええ、そうです。」（ガチャガチャと鍵を鍵穴に入れる）
「ああ、1）あけた。
2）あいた。
3）あけられた。」　　小林（1996：48）

（8）の出来事は１回性であり、動作主がいても肯定表現であるので、ＣＬにとっても可能の形態素が入りにくい。では、否定表現の例を見てみよう。

（9）日：（ガチャガチャと鍵を鍵穴に入れる）
「あれっ！？<u>あかない</u>！！」
中：（咔嚓咔嚓（ガチャガチャ） 的（と） 把（を） 钥匙（鍵） 插进（入れる） 钥匙孔（鍵穴））
「咦！？<u>打不开</u>！!」

（9）の日本語の文を中国語に翻訳すると、「Ｖ不Ｃ」のように可能の形態素が入る。

このように、肯定表現より否定表現の方が、可能の形態素が入りやすいということが分かる。

以上の議論から、出来事が実現するかしないかが焦点化されている場合、ＣＬは可能の形態素を挿入する傾向があるのに対して、ＪＮは、動作主が想定されない限りは可能の形態素を挿入しない、ということが分かる。これは日本語と中国語において可能表現を扱う際の大きな違いである。すなわち、ＣＬは、習慣性の出来事を表現するときは、ＪＮと同じく、動作主も原因も考慮することなく、動詞の基本形を使用する。一方、1回性の出来事を表現するときは、ＪＮが変化後の結果状態に視点をおいて自動詞で表現するのに対して、ＣＬは、動作主を想定できるか否かにかかわらず、可能／不可能という観点から捉え、可能の形態素を挿入する傾向にある。

このことを表にまとめると、以下のようになる。

（表 11）　自動詞の基本形を使う条件の比較

条件		日	中
出来事が習慣性である		○	○
出来事が １回性である	動作主あり	○	×
	動作主なし	○	×

（○＝自動詞の基本形を使う、×＝可能の形態素を挿入する）

（可能の形態素の入りやすさ：肯定＜否定）

8. 無意志自動詞の習得

まず、日本語教師が可能表現を教える際は、無意志自動詞の可能表現にも重点を置くべきである。また、日本語と中国語の可能表現の異同も教えるべきである。そうすることにより、ＣＬは、無意志自動詞の可能表現をより良く理解し、より効果的に習得できるであろう。

次に、アンケート調査とインタビュー調査の結果から、ＪＮが発する日本語も、ＣＬに影響を及ぼすことが示された。教科書の内容を把握するだけでは獲得できない自然な日本語の言い回しに接触することも学習に役立つと思われる。自然な日本語を授業に取り入れる一案として、日本語のニュースやビデオなどをＣＬに見せる、ロールプレイや交際会話の時間を設けるなどして、ＣＬの無意志自動詞の運用能力を育て、少しずつ母語の影響による誤用を除いていくべきである。

さらに、教科書には「無意志自動詞の基本形で出来事の実現の可否を表すことができる」および「無意志自動詞は可能形にできない」という２つの文法に関する説明を導入すべきである。また、第７章で述べた日本語と中国語における可能表現の使用場面の違いを教科書に含むと、ＣＬはより良く学習できると考える。

9. おわりに

本稿はアンケート調査とインタビュー調査を行うことにより、ＣＬは可能の意味を表す際には無意志自動詞の基本形を使わないことを明らかにした。

そして、日本語教育現場においては、ＣＬが無意志自動詞の基本形を使わない理由を重要視しておらず、これは、多くの教材において関連する説明が少ないことからも明らかである。

また、日本語と中国語の可能表現の違いについてみてみると、当該文で述べている出来事が実現するか否かが焦点化されている場合、ＣＬは可能の形態素を挿入する傾向があるのに対し、ＪＮは動作主が想定されない限りは可能の形態素を挿入しないことを、「習慣性であるか」あるいは「１回性であるか」という条件から論じた。

最後に、ＣＬの無意志自動詞の不適切な使用を改善するための日本語の教え方を、日

本語教師および教科書の 2 つの観点から提案した。

本稿では、アンケートに動作主が想定しにくい状況、および 1 回性でない状況などを想定した設問を用意したが、さらに設問の種類や数を増やし、分析を深めていくことを今後の課題としたい。

参考文献

張威（1998）『結果可能表現の研究－日本語・中国語対照研究の立場から－』くろしお出版

張麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析－中国語話者の母語干渉 20 例－』スリーエーネットワーク

青木ひろみ（1997）「《可能》における自動詞の形態的分類と特徴」『神田外語大学大学院紀要言語学研究』3，pp.11-26．神田外語大学

于康（2006）「日本語と中国語」『講座・日本語教育学』6，pp.141-155.

楠本徹也（2009）「無標可能表現に関する一考察」『東京外国語大学論集』79，pp.65-85．東京外国語大学

小林典子（1996）「相対自動詞による結果・状態の表現－日本語学習者の習得状況－」『文藝言語研究・言語篇』29，pp.41-55．筑波大学

都築順子（2001）「『可能の意味を含む自動詞』に関する一考察」『2001 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.85-90．日本語教育学会

呂雷寧（2007）「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」『言語と文化』8, pp.187-200．名古屋大学

（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）